

*「ポレーシエ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



消えることのない痛み

…事故から25周年となる新年を迎えて…

時とともに多くのことは忘れ去られ、多くのことは改善されるものです。私たちは、未だに戦争のことを記憶しており、毎年「勝利の日」を祝います。しかし、この「勝利の日」がたとえ涙を浮かべずにはいられない記念日であっても、「晴れやかなものである」のに比べ、「チェルノブイリ」は、私たちにとって「消えることのない痛み」です。政治家たちが、

事故の真の影響を隠そうとし、チェルノブイリについて沈黙を守ろうとし、その問題を厄介払いしようといかに努力しようとも、人々は、特に事故後の処理作業を行った人たち、そして被災者となった人たちは、いつまでも何ひとつ忘れることはありません。

ウクライナでは、25年の間、チェルノブイリに関する国のプログラムは一つとして実現されず、チェルノブイリに関する法律は遵守されないまま【…もしそれが現状に適合しないのなら、法律を改正すべきです】、何千人もの人々が病気に罹り、亡くなり続けています。そして生き残った人たちは、すでに空約束を信じなくなっています。

25周年の今年、一時的になされる措置はあるでしょうが、4月26日が過ぎれば、これまで多年の経験が示しているように、チェルノブイリはまた忘れられてしまうでしょう。ひょっとしたら、次の25年が過ぎるまでの間…。

今、新しい「石棺」の建設が、焦眉の課題となっています。それがどんなものかといえば、現存の「石棺」に封じ込められている4号炉を覆う形の、ただの建屋にすぎません。ちなみに、それも気密性のものではなく、つまり放射性的の粉塵は、いずれにせよ大気中に放出されるのです。したがって、原発構内の作業員たちは、被曝を避けられません。この「新石棺」も、長持ちするものではありません。

結果として、いずれは「新石棺」と「現石棺」、そして「爆発した4号炉の残骸」を解体するという、三重の問題を解決しなければならないこととなります。

(次ページへ続く)

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax : 052-732-7172 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ : <http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

使用済み核燃料の貯蔵所の問題も残っています。

しかし、これらについて知っているのは専門家だけであり、一般市民は、安全な「新石棺」の話を聞かされるだけです。現在、チェルノブイリが安全であるということを証明するため、「立入制限区域内に、観光客用のコースを設定する」という決定が下されました。今や、「放射線の危険性は神話だ」と言われ始めています。それが根拠のないものだと証明するために、30km 圏内への観光客の立入りを、許可することにしたのです。希望者はもちろん現れるでしょう。このようにして、チェルノブイリを利用した金儲けが、さらに続くのです。そのお金は、事故の後遺症の対策に用いられるわけではありません。

ここに述べたのは、新たな問題についてのみです。すでに存在する問題のことは、日本の友人の皆さんはよくご存知だと思いますから。

チェルノブイリ事故後 25 年、我々の基金設立後 21 年、日本との協力が始まって 20 年になります。チェルノブイリの問題はこれからも長く続くでしょう(私個人としては、永遠に続くような気がします)。ですから、我々の基金は長く存続せざるを得ないでしょう。私たちの友情も長く続くものと、僭越ながら期待しています。

私たちとの友情を結び、私たちを理解し、支援してくださっていることに感謝申し上げます！

慈善基金「チェルノブイリの人質たち」理事
ヴラディーミル・キリチャンスキー

2 月訪ウ計画 と 現地の近況報告

1. 2 月訪ウ計画について

今年の前定を現地で協議するため、2 月 4 日より 10 日間、河田・原が派遣されます。主な仕事は来年度の「菜の花プロジェクト」の進め方を話し合い、これまでのナタネの放射能分析結果、現地で菜の花プロジェクト報告会、ナロジチ病院の助成金による機器設置確認、在ウ日本大使館訪問、新行政長・農業技師・保健省との話し合いなど、毎度のことながら盛りたくさんです。

2. バイオガス年越しで発生中！

ラスキのバイオガス装置は、年を越した現在もガスが発生しています。外気温の低下とともに槽内温度も低下し、寒さとともに発酵条件は悪くなっているのですが、12 月中旬から発酵槽内の循環パイプに加温不凍液を流して加温し、ガスは発生し続けています。加温すれば、ガスが発生するのは当たり前ですが、昨年冬に装置の稼働を断念したことを思えば、大きな進歩です。冬を乗り越えることで得られるデータは貴重であり、槽内温度 6~7°C でもガスが発生していることは驚きです。



＜発酵槽内の循環パイプに、薪を燃やして加温した不凍液を送り込む。槽内温度は 6~7°C に上昇し、厳寒の中、ガス発生中！

(2010. 12 月)＞

3. BDF 実用中！菜種油搾油に課題

ナタネの搾油とバイオディーゼル燃料 (BDF) の製造は、昨年自前の搾油機で菜種油を絞り、その油から BDF を作ることができました。課題は搾油能率が悪いことです。搾油前に焙煎すればいいのですが、焙煎装置がなく、搾油機的能力が低いことも有ります。苦労をしながらも昨年造った BDF は、現地農業ステーションの機械やトラックの燃料になり、全量実際に使うことができました。

4. 廃液処理テスト始まる

バイオガス装置から排出される廃液中の、放射能と水との分離・放射能吸着は、このプロジェクト一番の課題です。放射能をうまく吸着できれば、廃液は液肥として農地に還元することができるからです。また、土壌からナタネで放射能を取り除くことに、一歩近づくからです。現地農大のディードアップ氏により、ベントナイト・ゼオライト・活性炭などの吸着剤を使つての吸着実験が、始まりつつあります。実験に使う放射能は、セシウムやストロンチウムの溶液・BG 装置の廃液・汚染地の草葉抽出液などで、2 月中には一定の結論が出る予定です。

(原 富男)

スタツア 2011 参加者募集!!

25周年祈念日(4月26日)を現地で!!

4月		日程(案)	宿泊地
1	20日 (水)	10:40 中部国際空港 発→ 14:50 ヘルシンキ 着	ヘルシンキ 泊
2	21日 (木)	11:15 ヘルシンキ 発→ 13:10 キエフ 着 コーラステン市へ ホテル 着	コーラステン 泊
3	22日 (金)	30 ^キ 区圏内(チェルノブイリ原発・旧プリピャチ市)の見学	コーラステン 泊
4	23日 (土)	*ナゾチ地区の学校で交流会(日本デー) ・公園散策など	コーラステン 泊
5	24日 (日)	ナゾチ消防署・ナゾチ地区中央病院 ・廃墟の村(ノヴァ・オェ・シヤルネ村)・教会など ジトミル市へ	ジトミル 泊
6	25日 (月)	ホステージ基金・ジトミル消防署 *第25番学校で交流会(日本デー) PM 8時頃 キャンドルセレモニー	ジトミル 泊
7	26日 (火)	25周年祈念式典 ジトミル市内観光	ジトミル 泊
8	27日 (水)	キエフへ ホテルチェックイン キエフ市内観光(チェルノブイリ博物館など)	キエフ泊
9	28日 (木)	14:00キエフ 発→ 15:55ヘルシンキ 着 ヘルシンキ市内観光	ヘルシンキ 泊
10	29日 (金)	ヘルシンキ市内観光 昼食後 空港へ 17:15ヘルシンキ 発→	機中泊
11	30日 (土)	8:50 中部国際空港 着 帰国	

企画：NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部
運営：株式会社ユーラスツアーズ大阪営業所
(観光庁長官登録旅行業第49号)

* 4月23日または25日に、住民の皆さんとの交流会を行います。

* 費用は25万円/人 (定員になり次第、締め切り)

* お問い合わせ、申し込みは、救援・中部 事務所

(電話 052-732-7172) へ

笑顔あり!
涙あり!
心に残る企画が
満載!!



<菜の花畑で記念撮影
(2008年4月)>



<カウンターパートの「ホステージ基金」事務所でミーティング
(2008年4月)>



<20周年祈念式典に参加し献花しました
(2006年4月)>



<世界遺産のソフィア寺院を背景に
(2006年4月)>

2011年4月24日(日)

名古屋YWCAにて『チェルノブイリ25周年記念イベント』を開催します。

私が生まれて26年。チェルノブイリで何があったのかも一切知らず、学校の教科書で『チェルノブイリ原子力発電所の爆発事故』のことを習いました。そして、この団体に出会うことがなければ、これから先も“そんなことあったな〜”で終わってしまうところでした。

事故から四半世紀が経ちましたが、支援者の方々から、毎年多くのご寄付や心温まるクリスマスカードをいただき、チェルノブイリの事故は、皆さんの心の中に風化されず生きていと感じさせられます。

”ナロジチ再生 菜の花プロジェクト”の始動から4年。これまでに、バイオディーゼル・バイオガス製造装置設置と試運転の成功までこぎつけ、これからは、支援地区などでバイオエネルギーを実際に利用し、「土壌浄化⇒農業復興」を目指していきます。

25周年記念イベントの報告会では、これまでの4年間の報告と、5年目のプロジェクトを語ります。
(山本梨恵)

チェルノブイリ25周年救援企画 in 名古屋 ～被曝した子どもたちの願いに応えるために～

日時：2011年4月24日(日) 13:30～

場所：名古屋YWCA 多目的ビックスペース

参加費：1,000円(18歳以下、障がい者無料)

講演者：フォトジャーナリスト 広河 隆一氏
チェルノブイリ救援・中部 神野 英樹氏

チェルノブイリ25周年記念 イベント 写真展

『広河隆一チェルノブイリ25年の軌跡』

期間：4月26日(火)～5月1日(日)

9:30～18:00(最終日は17:00まで)

場所：名古屋市民ギャラリー栄 第6展示室

観覧料：無料

1歳である事故に遭遇した子が25歳、手術を繰り返し、運よく薬にありつき、首筋の手術痕を隠し、結婚差別を潜り抜け、汚染のない地での保養の機会をつかみ、辛うじて生き延びて25歳。結婚・出産年齢。その生まれてくる子どもに「異常」が見られるけれど、その「異常」とチェルノブイリ事故との因果関係を認めない国家、その意向を受けた公立病院の医師たち。数年前ですが、汚染地ベラルーシ・ゴメリ市の公立病院でのこと。さまざまな病気の子どもたちが入院していました。その入院患者数は従前より増えていると言いつつ、医師たちは、その事態とチェルノブイリ事故との因果関係を否定しました。「この辺でも車が増えて、排気ガスが多くなっているから…」などと。

「2011年には、ゾーンや原子力発電所周辺を観光地として開放する」と、ウクライナ政府発表。原発事故卒業宣言・外貨獲得目的？ 被曝後遺症に苦しむ人たちを「国賊」視する政治風土。「頼りは国際救援だけ」と、すがるように訴える人たち。しかし、その国際社会も、事実かどうかわからない「地球温暖化」を振りかざして、核エネルギーに傾斜する。世界中が、彼ら・彼女らの命綱を断ち切ろうとしている、そのことに「待った」をかけたくて、この催事を開催します。今伝えなければ、ホントのことを伝えなければ、「私たちのような子どもを、もうこれ以上作らないで」と訴えた、あの子たちとの約束が守れないから。だから、どうぞ、講演会にも写真展にも来てください。「チェルノブイリなんて知らない」という世代を誘って…。

(広河隆一写真展事務局 宮西いづみ)

<カードキャンペーン最終報告>

昨年10月にスタートした『クリスマスカードキャンペーン』が、12月14日に締切りを迎えました。18日には、事務局一同、活動を支えてくださるボランティアの方々とともに、発送作業を行いました。1つ1つのカードを、折鶴などの折紙作品とともに封筒へ。みなさまに描いていただいたカードを、ワクワクしながら眺めつつ、作業を行いました。作業中は、ワイワイとした人のぬくもりもさることながら、カードを眺めるたびに高揚し、自然とみんなの心もほっと温かくなりました。僕自身、貴重な時間を過ごさせていただき、一足お先にクリスマスプレゼントをいただいたような気持ちでした。そして、20日に現地へ向けて発送。日本を旅立ったクリスマスカードは、2010年から2011年へと年をまたぎ現地へ。そして、子ども達の手へ。思いが伝わる瞬間に立ち会いたかったと、すこし悔しい思いもありますが、無事に届けることができ、ほっとひと安心です。

今回は、前回は700通あまり上回る『2,711通』ものカードを、子ども達へ贈り届けることができました。心の中でニヤニヤしている、今日この頃です。この幸せ感は、一重にご協力いただいた方々の支えによるものです。また、毎年贈り届けるクリスマスカードの枚数が増えており、波紋のように広がる、人のつながり



によるものだとも思います。クリスマスカードでつながる、「ヒト」と「ヒト」。「こころ」と「こころ」。ステキですね。研修生として「チェルノブイリ救援・中部」に関わらせていただき、約4ヶ月。団体発足当時から続いている『クリスマスカードキャンペーン』を担当させていただき、その歴史の流れの中に、その時の流れの一端を自分が担えたことを、とてもうれしく思います。今年は、原発事故から25年目。次回もより多くの思いを届けられることを願っています。『クリスマスカードキャンペーン』にご協力いただき、ありがとうございました。(高木 雅成)

カードキャンペーン作業報告

12月2日(木)名古屋市の山里学童クラブへ、カードキャンペーンの説明とカード制作作業の手伝いに行ってきました。午後3時半から、小学校の児童達と付添の職員の方に、カードキャンペーンの説明を行いました。参考に、ウクライナの子供達に日本からのカードを渡している写真やパネルを見せると、児童たちは興味深そうに見入ってきて質問をしてきたので、答えたりしました。その後、カード制作作業をみんなで行いました。子供達はそれぞれが工夫して、個性的なカードを作ってくれました。立体的に絵が飛び出るカードなど、見ていて面白いカードがたくさんでき上がりました。1人で何枚も制作する子も多く、子供達の工夫と熱意は、見ていても感心するものでした。ウクライナの子供達もカードを受け取れば喜ぶだろうなど感じました。(塚本 登志夫)

静岡サレジオ小学校訪問について

12月23日(木)今年もまた、「救援・中部」が同校の「児童創作オペレッタ発表会」に招待されました。代表として出席し、寄附金の贈呈式にも参加しました。サレジオ小学校は、長年にわたり私達の活動に協力していただいている学校です。



午後1時から、オペレッタが始まりました。題名が「ピノキオ」だったので、とても懐かしい感じがしました。子供達のとても熱心な演技に、つい引き込まれました。演出や歌などがとても興味深いオペレッタでした。オペレッタ等が終わりかけるときに、児童たちが昼食代を節約して貯めた寄附金と、父母後援会からの寄付金を、他の団体とともにいただきました。

児童や鑑賞された保護者の方々の前だったのでとても緊張しましたが、このように大切な寄附金をいただいたことに、とても感謝しました。このような催しが今後も続き、チェルノブイリ救援・中部とのつながりも続くことを願っています。(塚本 登志夫)

「ナタネプロジェクト」 5年目の課題

ジトーミル国立農業生態学大学 M. ディードゥフ

ほとんど25年が経った後でも、チェルノブイリの惨事は人類の関心の対象であり続いています。この事故が、環境や住民の健康、ウクライナ社会と経済の発展に及ぼした影響の規模は、巨大なものです。

事故の影響を克服するため多大の作業が行われた結果、健康に対する放射線のリスクはかなり低減され、汚染地域の社会的・経済的インフラは、相当程度整備されました。惨事の後遺症を除去し、放射性物質による汚染の影響から住民を守るための多面的な措置が取られた後、今日特に緊急の課題となっているのは、チェルノブイリの汚染地域の中でも最も汚染の激しい土地を、効果的に復興させる方法を開発することです。それは、自然の回復プロセスを最大限に考慮しつつ、一定の制限を伴いつつ明確な目標を持った、人為的介入を伴うものでなければなりません。それと同時に明らかなのは、チェルノブイリ事故の放射線学的後遺症、また特に社会的・経済的后遺症が、被災地域に否定的な影響を与え続けており、その住民が支援を必要としているということです。

そのような状況において、2007年に「チェルノブイリ救援・中部」のイニシアティブで始まった共同プロジェクト「ナロジチ地区復興ナタネプロジェクト」は、汚染地域の復興に向けての初めての複合的アプローチの一つとなったのです。これまでに行われた作業の分量と規模は、このプロジェクトが事故の影響を受けた地域の住民にとって、大きな放射線学的・社会的・経済的意味を持っていることを、説得力を持って示しています。プロジェクトの枠内で行われた研究は、ナロジチ地区の住民が、バイオ燃料の原料としてナタネを栽培するという方法による汚染地域の復興の必要性を、適切に理解する手助けとなっています。全体として、プロジェクトに設定された課題は、遂行されたと考えられます。しかし、行われた作業の性格と規模からは、このプロジェクトの枠内の重要な放射線学的・社会的問題が完全に解決されたとは言えません。プロジェクトの実施された4年間に蓄積された経験は、無条件（義務付）移住区域での生産活動を完全に止めてしまうことが、不可能であることを示しています。そうすれば、汚染された生態系が、放置された状態に戻ってしまうからです。自然発生的な事態の展開は、多くの場合二次的な、放射線学的・生態学的にマイナスの結果（火事・洪水・動植物の疫病の発生など）をもたらします。そうなれば、地域住民を危険から守るための、人為的介入が必要となります。一方、この土地で加工用農作物（ナタネ）を栽培することは、副産物（バイオマスや油粕）の形で、放射性物質を汚染地域外に持ち出す危険性を生むこととなります。この観点から、これらの原料を副次的なバイオエネルギー（バイオガス製造用のバイオマス）や、家畜飼料（油粕）に加工することの、放射線学的・経済的有効性の研究を将来行う可能性を、追求する必要があります。また、汚染された土地の利用の問題は、二つの側面を持っています。一つは、住民のまっとうな生産活動を保障すること、もう一つは放射線から住民を守ることです。

それは第一に、「復興の過程でのあらゆる作業は、人の健康を守る条件下のものでなければならない」ということ、そして第二に、「法的保障や保健・放射線衛生・社会経済・自然保護の規定の遵守に関する問題の、複合的な解決が必要である」ということ、また「復興作業がしかるべき順序で行われ、すべての段階でその前段階との整合性が得られなければならない」ということを意味します。したがって、今後継続して行われる作業との関連で言えば、本プロジェクトの最重要課題の一つは、ナタネ栽培とその産物の利用に携わる人々の、労働条件の放射線学・衛生学的評価でなければなりません。また、地元住民が、地域の将来の発展という問題の解決に積極的な役割を果たすようになるには、この汚染地域復興法についての明確なプログラムと、科学的勧告を作成することも必要です。

そして末筆ながら、ナロジチ地区のすべての住民に代わって、『ポレーシェ』読者の皆さんに、チェルノブイリ事故によって被災した地域の復興のため行っている善意の事業に、感謝したいと思います。「ナロジチ地区復興プロジェクト」継続に関する我々の努力に対する皆さんの大きなご支援がなければ、汚染地域の継続的発展、汚染地域の生活条件の復興への住民の積極的な参加、多くの被害を受けたチェルノブイリの大地に再び正常な暮らしを取り戻すこと、といった諸問題の解決の見通しは立たないのですから。



＜宮腰さんのウクライナ活動報告＞

(宮腰吉郎)

ウクライナの冬は初めてなのですが、やはり冷えた日の寒さは格別で、身体の芯まで冷えてしまいます。風邪対策としてマスクをしている人は稀で、「人混みに入る前に、鼻孔に薬を塗ってウイルス侵入を防ぐ」などの方法を毎回やっていたのですが、暖かい日が続き油断してやらずにいて、寒くなった日にあっさり風邪をひいてしまったのです。現地語で「太陽は照っているのに暖まらない」という言葉があり、日中晴れているのに寒いまま、というのは日本の感覚からは奇妙に感じます。太陽は南中時ですら、日本でいえば夕方という感じの位置にあり、昨秋、BG装置を温室で暖める案が出たとき、ウクライナ側から却下されましたが、確かに太陽の位置がこれほど低いと効果的とはいえ、ウクライナが高緯度地方に位置することを改めて実感しました。

先日、訪日したヤヌコーヴィチ大統領ですが、彼が政権を取った影響が今、私や竹内さんの出入りしているNGO「ゼムリヤキ」でも如実に表れ始めています。というのも、地区行政内で大幅な人事の刷新が行われ、事情を知らない人たちばかりになってしまい、幼稚園の一角を事務所としている「ゼムリヤキ」が今、追い出されようとしています。「ゼムリヤキ」は、現在地に移転してからすでに十数年間活動しており、住人からはなくてはならない存在として認知されています。また、事務所もほとんど使い物にならない状態から少しずつ自力で修理し、部屋に合わせて家具を調達してやっと今の状態にしたのに、そうした事情も一切顧みられず、問答無用で追い出されかけていました。代表タマーラさんの奔走で、なんとか「契約はないが、そのまま家賃を支払いつつ、当面は居続けることができる状態」にはなっています。しかし、あちこちでベビーカーを押す若いお母さんの姿が見られ、本当に子どもの数は増えているようで、「幼稚園の場所が足りない」という状況には変わりないため、いつかは出なくてはならないようで、今後は、移転後の場所の条件が焦点となります。すでに行政側から提示された場所がありますが、そこは、今の事務所からバスで30分はかかるような非現実的なところで、そこへの移転の可能性はまずないそうです。

こうした混乱は、行政で働く人たちの側にもあり、地区行政長以下の幹部に、地区の実情を知らない外部の政権与党支持者が抜擢されたため、行政機関も機能不全を起こしているようで、役所内の自分の持ち場に行っても、仕事のしようがない状態が続いているのだそうです。「この混乱は、オレンジ革命の時よりも大きい」とのことで、政権交代のたびにこんな大混乱を起こしているのは、国民が大迷惑だと思う一方、「いろんな問題を根本解決しようとせず、ズルズルと先延ばししている日本と、どちらがマシなのか」と、ふと考えることがあります。

菜の花プロジェクトとの関連で言えば、ウクライナの場合、「今の政財界を支配しているのは、概ねソ連崩壊時にうまく立ち回った人たちだ」と言われていて、一般の国民の生活は、独立後もずっと地を這い続けています。私は、せいぜいキエフとナロジチの生活しか知りませんが、都市も農村も年金だけではとても暮らしていけない老人と、能力に見合った仕事を見つけられない若者が多くいます。ウクライナでBG工場の稼働を成功させているゾルグ社の社長は、政府ではなく民間と組むことを勧めましたが、「政府に政策提言する」という今のプロジェクトの方向性が、果たして妥当なのかどうか、ウクライナ側の協力者とも協議をした上で、「5年計画後、被災地の住民の生活向上に寄与する方向性が見いだせること」を強く願っています。



＜出国直後、寒波のため乗継空港で足止め＞
その後、竹内さんより

「宮腰さんは、大変お気の毒なことに結局二晩をモスクワの『シェレメチェヴォ空港(写真)』で過ごされ、こちらの28日午前拙宅に到着。食事をとった後、仮眠中です。」

連載 74 号でも紹介したが、ウクライナは今年、バイオエネルギー特にバイオガス (BG) 生産に、大きな拍車がかかりそうだ。「GreenTariff (緑の税制) というバイオエネルギー優遇制度が本格化し、中でも BG に対する優遇を政府が約束したため、BG ビジネスが急増している」と、1 月 17 日のニュースが伝えている。ウクライナは、石油も天然ガスもロシアに依存し、それが EU 加盟派と親ロシア派の対立の根にもなっているため、自前のエネルギー確保が緊急の課題である。

こうした背景の中で、我々の小さな「ナロジチ再生 菜の花プロジェクト」が、昨年 11 月 18 日に、現地 TV の全国放送で紹介された。5 年目のプロジェクトを、次につなげよう！

● BG ブームは世界の流れ

スウェーデンのストックホルムは、2010 年度の「EU のエコ首都」のタイトルを獲得した。家庭や事業所の生ゴミを集め、下水汚泥や家畜し尿などと一緒にして BG を作り発電し、その電力でビルの空調を殆どまかない、さらに、BG を精製して組成を天然ガスと同等にし、ガスのパイプラインに供給する、などが評価された。脱原発を選択したスウェーデンの到達点である。これまで BG は、比較的小型で個人向けや事業所単位のものが多かったが、過去 10 年の技術の進歩で、様々な有機廃棄物の混合発酵や、BG 利用技術が発達し、大規模 BG が登場し始めた。こうした流れの背景には、「バイオエネルギー生産と有機廃棄物処理を連動させ、地域のエネルギー自給と環境対策を通じて、温暖化問題に貢献しよう」という動きがある。「捨てればゴミ、使えば資源」である。もちろん、「石油枯渇による価格高騰は、今後ますます加速する」という危機感もある。ドイツやスウェーデンを中心とした EU 各国が、こうした流れを加速しているのだが、それは世界にも広がっている。昨年 9 月、中国は世界最大の BG 工場の稼働を発表した。場所は、遼寧省 Huishan の農場で、当面は牛 6 万頭の廃棄物による BG 発電だが、将来的には 25 万頭分の処理を行うという。これまで中国は、小型 BG で世界有数の普及率を誇っており、現在、BG 関連の企業が約 4,000 社あるという。

● BG の様々な利用

BG ブームが可能になった理由の一つは、その利用技術の発達にある。BG は、メタンガスが 50~60%、残りが炭酸ガスで、天然ガスに比べて品質が悪く、燃料以外にはあまり使われなかった。しかし、近年の新たな技術で、炭酸ガスを減らしメタンを濃縮し、天然ガスと同等にできるようになり、これをバイオメタンと呼ぶ。その結果、通常のパイプライン

に接続が可能になっただけでなく、自動車燃料としての利用が広がった。ストックホルムのバスの多くは、バイオメタンで走っているという。スウェーデンが 2005 年に走らせた、世界初の BG 列車は有名である。ディーゼル車を改造したもので、BG ボンベを積み、120 km を走っている。昨年 12 月、スウェーデンは、これも世界初の雪かき用ラッセル車を BG で走らせた。2009 年にはドイツで、大衆車アウディ RS4 を改造したバイオガス・レーシングカーが、時速 364.6 km の世界記録を達成した。ドイツでは、現在「バイオガス・ハイウェイ」構想が始まっている。「ヨーロッパの高速道路をバイオガス化しよう」という壮大な計画で、2008 年 12 月に、ドイツの高速道路沿いの二つの町に、バイオメタン・スタンドが設置され、天然ガス車に給ガスを開始した。先進国スウェーデンでは、10 年前からバイオガス車が普及し、ストックホルムとイエテボリ間の高速道路は、既にバイオガス・ハイウェイと呼ばれている。

● 日本では

一方、生ゴミに石油をかけて燃やす日本は、世界の BG 競争から大幅に遅れている。北海道や九州で、畜産廃棄物や酒粕による BG 施設はあるが、試験段階のものばかりである。最大の障害は、石油業界や電力業界に依存する、政府の様々な規制である。BG 施設を持つ北海道鹿追町や京都市などで作る「バイオガス市町村長懇談会提言書」が、2009 年に政府に出されているが、それに応える気配はない。「原発輸出で経済成長を」と、時代遅れの政策にマスコミも浮かれている。日本は、BDF でも新たな規制を導入し、持続可能エネルギー革命からますます遠のいている。

「BG は初期投資が大変だ」といわれるが、ひとたび作れば、原料が何時までも供給できる「持続可能エネルギー」の最たるものである。

新たなエネルギー革命に、目を開こう。(河田)



＜キエフにて（右が筆者）＞

＜ウクライナ視察報告＞

三重大学生命科学研究支援センター准教授 市原佐保子
チェルノブイリ原発事故後の「ナロジチ地区住民の健康調査」に参加し始めた。チェルノブイリ原発事故のニュースを聞いたとき、自分は何歳で、何をしていたらだろうか。当時も、対岸の火事であり、現在は、その記憶さえもあいまいになっている状態であった。「放射線の専門家ではない純粋な循環器専門医として、プロジェクトに協力して欲しい」と言われ、力になろうと考えた。

昨年の秋、ナロジチ地区病院を訪問した。医療機器が発達している現在の日本では、医療現場はCT・血管造影・超音波検査などの画像診断に頼る。画像診断に頼りすぎるがために、我々医師の「触診・聴診・打診」という、基本的な自らの手や耳で診断する能力が落ちてきている。それ故、医療機器が完備されていない田舎での勤務を嫌がり、都会に集中する医療偏重が生じている。ナロジチ地区は、数十年間時間が止まったような場所であった。地区病院も、もちろん高度な医療機器はない。そこには、できる限りの能力を生かし、まじめに真摯に診療に取り組んでいる医師たちがいた。

内科医長は、「最近、地区の20-30歳代の若い人に心疾患が増えている」と言っていた。「それが、チェルノブイリ原発事故と関係あると思うか」と聞いたら、言葉を濁した。さらに、「チェルノブイリ原発事故の影響がまだ残っているこの土地で働いていることをどう感じるか」との質問には、長い沈黙があり、その後も明確な意見は示さなかった。チェルノブイリ原発事故自体が地域住民に与えた影響の大きさと、現地に住んでいる住民の苦悩が感じられた。医師は「病気を診るのではなく、人を診る」ことが大事だと考えている。これからも、できる範囲で、ナロジチ地区住民を診続けていきたいと思う。

財政再建(委)からの報告

① 「1坪キャンペーン」は3月末で締め切りです。

113号(09.09.30発行)で呼びかけて以来、昨年未までに76名、173口、519,000円のご協力をいただきました。昨年6月初め、菜の花畑に「1坪キャンペーン」協力者お一人お一人の名前を記した看板を立てました(118号で報告)。新年度は、菜の花プロジェクト最終年に入り、菜の花は春撒きが最終実験畑となり、この畑に協力者の看板を立てるのも最終となります。その為、「1坪キャンペーン」の募金募集を、3月末にて締め切らせていただきます。残り2ヶ月ですが、1人でも多くの方のご協力をお待ちいたします。



② 賛助会費納付のお願い

費目を問わず、年間3,000円以上のご寄付をいただいた方々を、「賛助会員」として「ポレーシェ」の送付をさせていただく制度を、昨年より採用しました。皆様のご協力に感謝申し上げます。しかしながら、前号で報告しました様に、寄付金・件数とも近年にない落ち込みをしています(4~12月 金額20%減、件数15%減)。昨今の厳しい経済環境の中、非常に心苦しいお願いではありますが、本年度の賛助会費(費目は問いません)3,000円の年度内納付に、ご協力いただけますようお願いいたします。

③ 11・12月寄付金のご報告

寄付金は、11月106,000円(20件)、12月1,021,767円(138件)でした。皆様のご支援に、重ねて感謝申し上げます。

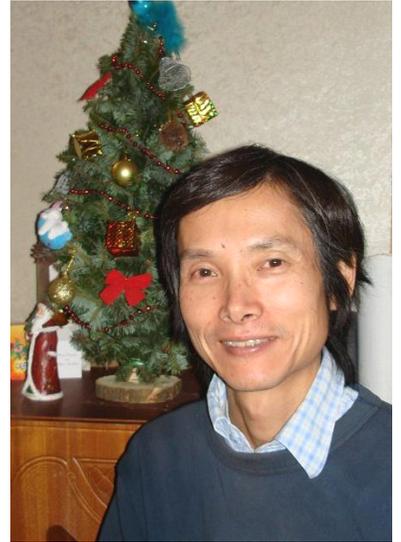
(神谷)

竹内さんのウクライナ便り

前回の拙稿に書きました「新税法に対する抗議行動」の結果、大統領は同法への拒否権を発動、いくつかの譲歩を含む新法案が最高会議で改めて可決されました。しかし、その後独立広場のテント村は強制撤去され、抗議行動の中心人物数名は、同広場の敷石を破損したとの罪状で告訴されています。一方、日本でも報道された通り、ティモシェンコ前首相は在任時の職権濫用容疑で訴追され、「オレンジ革命」時の立役者の一人でティモシェンコ内閣の内務大臣だったルツェンコ氏も、やはり職権濫用を理由に逮捕されました。これに先立ち、同じく前政権の下で大臣や副大臣を務めた人物数名が、種々の名目で逮捕されていますが、国際指名手配を受けプラハで拘留されていた元経済大臣ダヌィルシン氏は、最近になってチェコへの政治亡命を認められました。この人は、日本のODAで現在拡張工事が進んでいるボリスピリ国際空港の新駐車場建設の入札に際し不正を働き、国に1,390万グリヴナ（1億4千3百万円程度）の損失を与えたという嫌疑で指名手配されていたのですが、チェコ政府は、彼が「ウクライナに送還されれば、政治的理由で偏向した裁きを受ける可能性が高い」と判断したわけで、野党系のメディアは大きく報道しています。もっとも、ウクライナの独立後、ウクライナ国民の他国への政治亡命が認められたケースはこれが初めてではなく、例えば2000年のゴンガゼ記者殺害事件後、当時のクチャ大統領がその指令を出したとして（その真偽は現在に至るまで不明のまま）、証拠の「盗聴テープ」を提供した元大統領付ボディガードのメリニチェンコ氏、またゴンガゼ夫人は、ともにアメリカに亡命しています（メリニチェンコ氏は「オレンジ革命」後ウクライナに帰国）。しかし、ユシエンコ大統領時代にはなかったことであり、この件は「現ヤヌコーヴィチ政権下で、新たに野党勢力への締め付け・人権軽視の傾向が強まっている」という批判の根拠にもなっています。

ウクライナの司法制度が汚職漬けになっているというのは、遺憾ながら一般市民の共通認識であり、「裁判ではお金を持っている方が勝つ」という話は、私も何度か聞いたことがあります。私の知人のNさんは、

チェルノブイリ事故発生の直後、現場に入った消防士らの被曝線量を測定して二次被曝をされたのですが、書類の不備を理由に現在まで事故処理作業者の資格を認められて



<自宅のミニ・クリスマスツリーの前で>

おらず、彼女のお連れ合いが改めて事実関係を証明する書類を揃えて裁判に訴えたにもかかわらず、敗訴してしまいました。このご夫妻は上告しても無駄と考え、ウクライナに絶望してすでに国外移住を検討されているそうですが、その理由の一つとしてNさんは「いつまでも裁判にこだわって闘い続けていると、そのうち夫が夜道で暴漢に襲われてしまうのではないか」という恐れを挙げておられました。杞憂と片付けてしまえないのが大変残念です。

一方、1月20日早朝、ドネツク州マキイウカ市の2ヶ所で爆発事件があり、被害者はなかったものの、犯人は未だ不明のままです。爆発物はいずれも手榴弾程度のもので、昨年からいくつかの地方都市で起こっている同様の爆破事件とともに、国内の「民族主義過激派」に対する国民の恐怖感をあおり、「安定と秩序」を求めて現政権への依存感を高めさせようという工作なのではないか、という見方も独立系メディアでは表明されています。この事件に対応するため、訪日中だったヤヌコーヴィチ大統領は急遽予定を変更して帰国したそうですが、とはいえ、今のところ、キエフ市民がテロの恐怖に怯えているというような空気はなく、おおかたの国民は事態を冷静に受け止めているようです。（1月27日）

事務局便り

今まで事務局員として、また、主に会計として活躍していた山本梨恵さんが、この春に看護学校の3年生となり、実習を伴う学業に専念しなければならなくなった。何に対しても大変意欲的な山本さんだったので、彼女が辞めてしまうのは、私達にとってとても残念なのだが「将来看護師を目指し、海外で活躍したい」という目標があるので、退職はやむをえないところだ。

そこで、彼女の後任を募集したところ、名古屋NGOセンターの「NGOスタッフになりたい人のためのコミュニティカレッジ=通称・Nたま」の第7期生、兼松真梨子さんが、山本さんの後任としてチェル救事務局で働くことになった。「家事との両立と、世の中の役に立ちたい、社会とのつながりを強くもちたい…という想いを実現できるチャンスではないかと感じ応募した」…とのこと。率直で、自然体の26歳。いかんせん、事務局の老齢化は食い止めようもなく（…ま、老齢化が一概にまずいわけではないが）、かろうじて山本さんで持ちこたえていた(!?)「元気」は、打ち止めかと思いきや、兼松さんの登場で食い止めることが可能になり、ホッとしている。兼松さんは、「そとうちエコごはん」の活動を「まゆもりリビング」で運営しているとか。一体何のことやら…と思うが、この活動は「食卓から、農業や環境問題・社会が抱える問題などについて考えるきっかけをつくろう」と始めたとのこと。おいしく、楽しく、ためになる活動らしい。詳しいことは、いずれご本人から…。

ナロジチ菜の花プロジェクト5年目の春を、事務局も「希望」を持って迎えることができそうだ。山本さんは、兼松さんへの引き継ぎをしながら、4月までは今まで通りはりきって働いてくれる。その後は、運営委員かな?? ポレーシェ読者の皆様、本年もよろしくお願いたします。(山盛)

お宝ネット 発送先および連絡先

〒399-4511

上伊那郡南箕輪村南原 9955-2 原方
「救援・中部 お宝ネット」宛

TEL 0265-73-9355

Fax 0265-73-9352

編集後記

☆中学生に家庭教師風の若者が説教中。若者いわく「高額年収が欲しければ大企業に就職する。大企業に入るためには有名高校に進学して有名な大学に入るべき。」と、「僕の自慢話」に花開く。大企業狙いで内定がもらえず、就職難民があふれている今、こんな先輩に日本を任せたくないぞ。(美)

☆タイガーマスクのリアルタイム世代の私だけど、プロレスの試合シーンの迫力、とくに血しぶきが幼な心に恐ろしくてまともに見られなかった。懐かしいのでまた見てみたい。乞う再放送!(佳)

☆『NGOと企業のCSR連携シンポジウム』(1/27)で報告された連携事例では、それぞれ国内外とも「人と人のつながり」からの「地域づくり・人づくり」がキーワード。それぞれの強みを活かし、弱いところを補い合う協働。中小NGOと中小企業だからこそできる、中部地域ならではの「顔の見える連携」だ。さて、我われは?(と)

☆アメリカの中央銀行にあたる(ただし、国営ではなく民間企業である)米連銀(FRB)が、倒産の危機に瀕している。お金を無から作り出し、サブプライムローンをはじめとする金融派生商品(デリバティブ)というバクチを仕掛けて、見事に失敗。胴元が破産してしまったわけである。世界の機軸通貨体制が、新しく生まれ変わろうとしている。日本は、アメリカに抱きつかれ心の中するのか? それとも、アメリカから独立を勝ち取るのか? 今年は、その決着をつける年になる。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473